

自動詞と他動詞

「私は真実が知りたい」を読んで

こんなに苦い読後感はきっと初めてだ——。

赤木雅子・相澤冬樹共著、「私は真実が知りたい」(文藝春秋社刊)を読んだ。副題は「夫が遺書で告発 『森友』改ざんはなぜ?」となっている。森友学園疑惑で、自殺を強いられた当時、近畿財務局管理部上席国有財産管理官だった赤木俊夫さんの妻・雅子さんと、ジャーナリストの相澤冬樹さんによる渾身の告発ドキュメントである。

「死ぬ」は自動詞であり、「殺される」は他動詞だ。私たちはときたま間違っ「交通事故で死んだ」という表現をするが正確には「交通事故によって殺された」と表現すべきだろう。その意味からすれば赤木俊夫さんは殺された、と見るのが妥当な識見である。ということは、赤木さんは「他者」によるベクトルによって死に追いやられたのである。

著書は、赤木俊夫さんがコードを首に巻いた状態の、発見時のショッキングな場面から始まる。コードを切ると宙に浮いていた体が床に落ちた。「トッチちゃんの体はまだ温かった。」雅子さんは俊夫さんこのことを「トッチちゃん」と呼び、最後までこの呼称は続く。

「私の夫、トッチちゃんは二度と返ってこない。でも私の人生は続く。真相がわからないままでは私の人生をリセットできない。トッチちゃんはなぜ追い詰められたの? 改ざんはなぜ行われたの? 国有地の値引き売却がそもそもおかしかったんじゃないの? なぜそんな値引きをしたの?」——本を書こうと思ったきっかけは、この数行に凝縮されている。

記録を残すことと裁判を起こす決意をするまでも含めて、雅子さんの複雑な思いがにつづられる。近畿財務局の当時のトッチちゃんの上司や同僚は次々と異例の出世をしていく。その様は文字面にはなっていないが、トッチちゃんを踏み台にするように。

誰を信じていいのか、雅子さんは苦しむ。その苦しみに対峙してくれたのが相澤冬樹さんだった。その相澤さんもジャーナリストとしての自分と、被害者としての雅子さんにどう向き合っていくべきか、悩みぬく。その二人の思いはメールのやりとりを公開したことで、読者に伝わる。

森友疑惑が発覚した2017年の「新語・流行語大賞」は、「付度」と「インスタ映え」だったのは記憶に新しい。「付度」を発信したのは、8億円もの値引きによって土地を入手した、当時の森友学園の籠池泰典理事長だった。この言葉、おもしろいことに今日に至っても、政治、社会、経済の世界で使われ続けている。その事実は、この事件の真相を物語っていると言えないか。

2017年2月17日の衆院予算委員会で安倍晋三首相は、森友問題について「私や妻が関係していたということになれば、まさにこれはもう私は、それはもう間違いなく総理大臣も国会議員もやめるということのはっきりもうしあげておきたい。」(議事録のママ)と豪語した。この一言が誰かを付度させ、トッチちゃんに公文書を改ざんさせ、死に追いやるものとなったことは誰の目にも明らかだろう。

公の場で真相を明らかにしたい、という思いから裁判を起こした時、雅子さんは文書改ざん問題の再調査を訴えた。が、麻生太郎財務大臣は「調査はすでに終わっている」と拒否した。そのときの雅子さんのコメントが振るっている。「あの人たちは調査される方で、する方ではない」と。見事である。

私の座右の銘は「戦争で殺されるより、戦争反対の運動で死にたい」である。自分の終焉は他動詞ではなく、自動詞で迎えたいから。
(事務局長・水久保文明)

*千代田区労協通信バックナンバー/http://www.chyda-kr.org/kuroukyou_news2020.htm

※皆さんからの投稿、感想・ご意見などお待ちしております。